曲目解説

前奏曲　BWV29 ―――――――――――――――――――――――――――――――――――――バッハ

カンタータ第29番「神よ、あなたに感謝をささげます」のシンフォニアです。お聞きになればすぐに気づかれると思いますが、この原曲はバッハ自身の有名な無伴奏ヴァイオリンのためのパルティータ第３番ホ長調の前奏曲です。原曲の旋律は終始オルガンの右手で奏されます。トランペット、オーボエ、ティンパニーと弦楽が付加され、二長調に移調されたこの曲は、原曲とはかなり異なった趣を見せています。

二つの悲しい旋律 ―――――――――――――――――――――――――――――――――――グリーグ

２曲の抒情曲から成るこの作品34は、1880年作の作品33の歌曲集のうち、第１巻の「六つの歌」のなかの第２曲目と第３曲目を原曲としています。ただし歌曲集では、「過ぎし春」「胸のいたで」の順ですが、編曲に当って、この順序が逆になっています。編成は弦楽オーケストラですが、第２ヴァイオリンとビオラは常に二部に分れるほか、「過ぎし春」では第１ヴァイオリンとチェロも二つに分れます。

組曲「マスクとベルガマスク」 ―――――――――――――――――――――――――――フォーレ

1920年に、フォーレはレジョン・ドヌール勲章を受けていますが、この年に、この管弦楽のための組曲「マスクとベルガマスク」が作曲されました。その題名は、さきにフォーレの書いた歌曲「月の光」―― ヴェルレーヌがワットーの絵に霊感を得た詩による歌曲の中からとられました。

全曲は、序曲とメヌエット、ガボット、パストラールという３曲の古典舞曲形式のナンバーからなっています。そして、ワットー、ヴェルレーヌ、フォーレという組み合わせから予感される優美で雅びやかな抒情性とは全く異質な喜遊曲的な傾向の作品となっています。フォーレはここで、18世紀の作曲家の手法によって、軽妙な仮面舞踏の道化とひなびたベルガモ風舞踏を思い描いているように思われます。

交響曲第４番 ―――――――――――――――――――――――――――――――――――ベートーベン

ベートーベンの交響曲のみならず、交響曲のすべての歴史において偉大な地位を占めるあの「英雄交響曲」の二年後に、この美しい交響曲は世に出たのです。「英雄」と比較してみますと、この作品では、ベートーベンは、様式的にはむしろハイドンの方法にたち帰っているかのように見えます。序奏をもった第１楽章、抒情豊かな緩徐楽章、メヌエットとトリオ、舞曲的なフィナーレという古典的性格の強い構成、又そのオーケストラの編成をみても、彼の交響曲中で最も小さいものになっていること、などがそれを示しています。

しかしながら、こうした外観からベートーベンの後退などとは言えないばかりか、むしろ彼の精神的な成長を見のがしてはならないでしょう。たとえば、第１楽章の序奏だけをとりあげてみても、そのすばらしさは正に筆舌につくしがたいとしか言いようがないほどです。そして明るいものと暗いものの戦いが全曲を貫くこの交響曲にみなぎっている強い力は、我々を圧倒せずにはおかないでしょう。

ベートーベンがこの曲を作曲したのは、彼の生涯を通じて最も幸福な日々でした。すなわち、ベートーベンは、1806年の５月、愛するテレーゼ・フォン・ブルンスヴィックと婚約し、みずからの生活を調和と明朗さの中に育てようとしていたのです。創作途上にあった第５交響曲を中断して、一気にこの交響曲を書いたのも、その幸福感がさせたものかもしれません。（なお、この第４交響曲の冒頭旋律と第５交響曲の冒頭主題のひそかな関連についての吉田秀和の指摘は極めて興味深いものがあります。）またこの時期に書かれた作品をあげてみますと、歌劇「フィデリオ」、ピアノ協奏曲第４番、ヴァイオリン協奏曲など傑作ぞろいで、ベートーベンの恐しいほどの創作力の噴出であります。

この交響曲は、1807年３月、ベートーベンの援助者のひとりであったロブコヴィッツ公の催す演奏会で初演されたようですが、その年の11月15日にウィーンにおいて公開の演奏がなされました。